



災害対策用ヘリコプター

「ほっかい」が北の大空へ。

災害状況をリアルタイムに伝える

北海道開発局では、災害時において迅速で広範囲な情報収集活動を行う目的で、災害対策用ヘリコプターを導入した。

これまでも釧路沖地震、北海道南西沖地震、北海道東方沖地震などの大規模な地震によって、本道は大きな被害を受けており、また平成7年1月の阪神・淡路大震災の惨状は記憶に新しい。政府はこの阪神・淡路大震災を契機に、航空機などを活用することで情報収集能力を高め、復旧体制の強化を図ることになった。災害時の早期情報収集や的確な情報は、災害復旧などの対策には非常に重要な意味を持ち、本道でも災害対策用ヘリコプターの導入を望む声は高かった。

平成9年1月28日には災害対策用ヘリコプターの就航式が行われ、愛称も「ほっかい」に決定。北海道の雄大さ、力強さをイメージし、北海道開発局の「北開」から名付けられた。

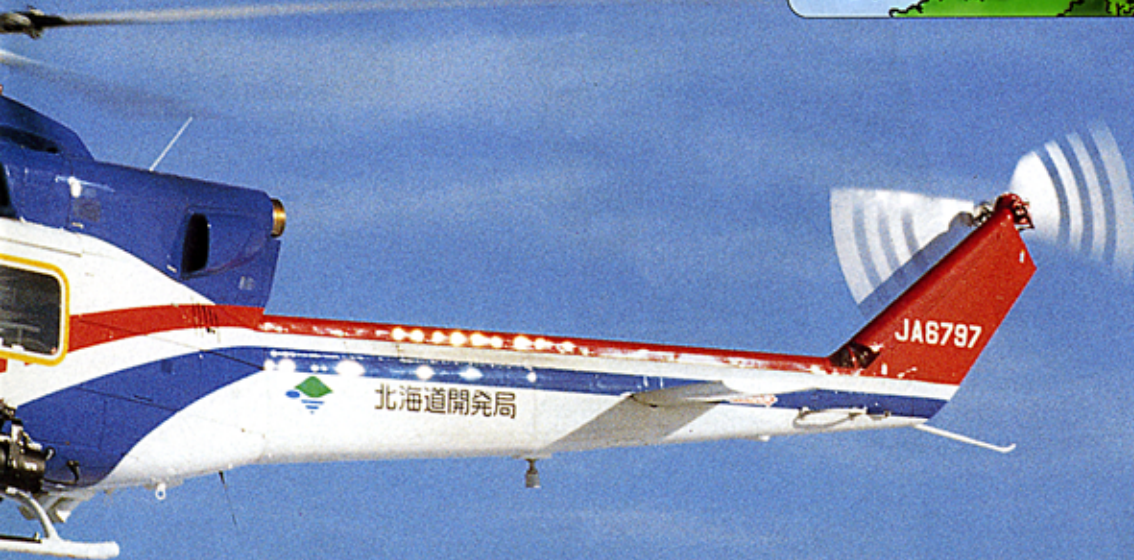
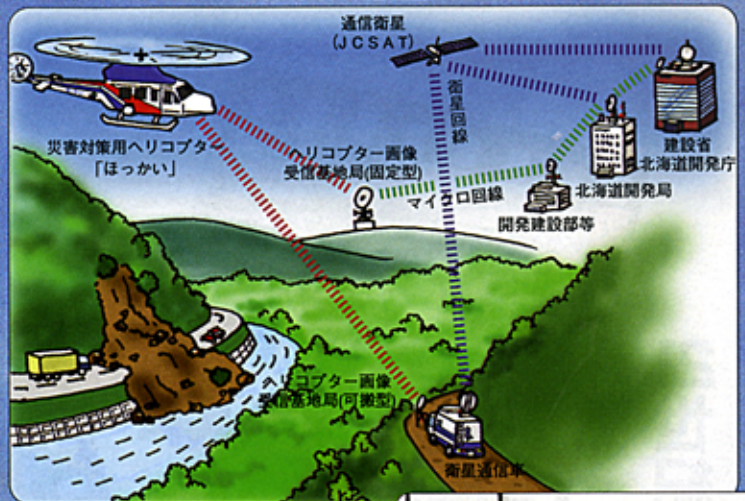
道内の行政機関が所有するヘリコプターは「ほっかい」の他に3機あるが、利用目的は若干異なる。例えば札幌市消防局の消防ヘリコプター「さっぽろ」（平成3年3月1日運航開始）は、被災者の救出や搬送、人命救助、救急患者の救護・搬送、消火活動などが主目的に。また北海道の「はまなす」（昭和55年運航開始）や「はまなす2号」（平成8年7月1日運航開始）も上空からの救助、災害状況の把握、救急医療患者の高次医療機関への搬送など人命救助などに活躍している。

その点「ほっかい」は災害発生時にリアルタイムで対策本部等へ状況を知らせる高度なシステムを持ち、災害時の情報収集が主眼である。最大実巡航速度220km/hで、8名搭乗した場合実運航時間は約2.6時間（30分の余裕時間をみて）、運航距離は約590km。札幌を中心に北は稚内、西は奥尻島、東は根室半島、南は岩手県盛岡市までカバーできる。

情報収集の機能を満載

災害対策用ヘリコプターとして導入された「ほっかい」の最新鋭装備の中で、まず注目すべきものに「ヘリコプター画像伝送システム」がある。ヘリコプターに搭載されたTVカメラなどから空撮映像を、地上に設置された受信基地局（固定型、可搬型）へ無線伝送するもので、マイクロ回線網や衛星通信回線を利用してリアルタイムに建設部、本局、北海道開発庁などに画像を伝送する。しかもTVカメラは機体の振動でも映像がぶれないよう、ウエスカムという球型の防振台に収納。レンズは40倍ズー





ムで、機内からリモートコントロールで全方位(水平360°)の撮影ができ、機内のモニターに映像を写すことも可能だ。火山活動の監視に威力を発揮する「赤外線カメラ」や、各種データを電波で地上受信基地に伝送する「無線装置・アンテナ」なども搭載している。

この他、デジタルスチールカメラで鮮明な写真撮影を行う「垂直写真撮影装置」。0.02ルクスの明るさでも撮影可能な「夜間撮影システム」。高度300mから照射してもおよそ直径20mの範囲で新聞が読めるという「サーチライト」。高度300mから地上半径300mの範囲で音声が届く

「機外スピーカー」。2tまで吊ることが可能な「機外吊り下げ装置」。カーナビゲーションのヘリコプター版装置「GPS/MAP装置」。雪上着陸に使用する「スノースキッド」など、「ほっかい」は様々な機能を満載したハイテク・ヘリコプターである。

今後、災害時においては迅速に被災状況の調査を行い、二次災害の防止や円滑な道路交通の確保、災害復旧作業時の支援などに対応。平常時は上空からの調査に使用するなど、その活躍が大いに期待されている。

■ヘリコプターの諸元

型式：ベル412EP型(米国)	航続時間：5.1h(最大航続時間)
機関最大出力：1,800SHP	約2.6h(全装備実運航時)
最大重量：5,398kg	航続距離：858km(最大航続時間)
搭乗者数：8名(全装備時パイロットを含む)	約590km(全装備実運行時)
全備重量：3,755.5kg	燃料タンク：標準 1,249ℓ
最大巡航速度：258km/h	増設310ℓ
最大運用高度：5,029m	